

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 高知県高知市丸ノ内1丁目7番52号
管理機関名 高知県教育委員会
代表者名 高知県教育長 伊藤 博明 印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成31年4月1日(契約締結日)～令和2年3月31日

2 指定校名

学校名 高知県立高知西高等学校

学校長名 竹村 謙

3 研究開発名

「食を活かした地域創生」をテーマにしたグローバル人材の育成

4 研究開発概要

食に関する課題や地域活性化事例を収集・分析し、グローバルな視点から地域創生モデルを提案する取組を通して、コミュニケーション能力をはじめ、リーダーシップ、課題発見力・解決力、創造的思考力などを身に付けたグローバル人材を育成する。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程 平成31年4月1日～令和2年3月31日										
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
SGH運営指導委員会による進捗管理	←	第1回	取組状況をSGH通信で配信						第2回	→	
グローバル教育推進委員会による取組支援	6月	7月	8月	第1回	10月	11月	12月	1月	第2回	3月	
施設・設備の整備	特になし										

(2) 実績の説明

ア 運営指導委員会の実施による進捗管理

(ア) 第1回SGH運営指導委員会 (令和元年7月4日(木) 15:20～17:30)

出席者: 委員2名、高知西高等学校12名、教育委員会5名

(イ) 第2回SGH運営指導委員会 (令和2年2月13日(木) 16:00～17:40)

出席者: 委員5名、高知西高等学校12名、教育委員会5名

イ グローバル教育推進委員会による助言

2回のグローバル教育推進委員会を開催し、各委員から指導・助言をいただいた。

(ア) 第1回グローバル教育推進委員会 (令和元年7月17日(水) 9:30～12:30)

出席者: 委員5名、推進校15名、県教育委員会9名、県教育センター7名

(イ) 第2回グローバル教育推進委員会 (令和2年2月3日(月) 9:45～14:40)

出席者: 委員6名、推進校13名、県教育委員会7名、県教育センター7名

ウ 成果普及のための取組内容

(ア) 人的支援

これまでに採用された外国人講師3名に加え、外国人期限付き講師1名及びALT(外国語指導助手)2名を合わせた6名の英語母語話者を配置した。外国人講師は、日本人教員とのチームにより、教科指導や学校運営、生徒理解などを学びながら、副担任としても学級経営に携わるほか、英語の授業を単独で担当した。

(イ) 中学校へのPR

併設されている高知国際中学校には、各事業への参加の呼びかけや、アンケートへの協力、検証等を要請。また、県内の中学校に対しても、それぞれの学校に赴いて行う学校説明会でSGH事業について紹介するとともに、国際シンポジウムや研究発表会の案内を送付するなど普及啓発活動に努めた。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目		実施期間（平成31年4月1日～令和2年3月31日）											
プログラムの進捗管理		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
グローバル探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 学習指導案の作成と評価	学習指導案検討と授業評価の実施（週2回）											
	フィールドワーク（FW）	条件整備 作成	条件整備 募集・選考	条件整備 派遣生徒の た事前指導	中間評価 FWに向け た事前指導	条件整備 FWの実施	条件整備 大阪・県内 実施	条件整備 海外FWの 指導等	条件整備 FW事後 指導等	条件整備 海外FWの 実施	条件整備 東京FW 事前指導	条件整備 東京FW 事前指導	評価 東京FWの 評価・改善
大学との連携		条件整備 作成	条件整備	条件整備	条件整備	大学教員に よる指導	大学教員に よる指導	大学教員に よる指導	学生T・Aに よる助言	学生T・Aに よる助言	学生T・Aに よる助言	成果発表・ 評価	事業評価
英語探究活動の学習指導案の作成と評価		学習指導案検討と授業評価の実施（毎週）											
評価の研究			事前 指導	実施 テーマ①	評価		事前 指導	実施 テーマ②	評価		事前 指導	実施 テーマ③	評価
				調査 実施	分析	まとめ						調査 実施	分析・ まとめ

(2) 実績の説明

ア 「グローバル探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の実施に伴うPDCAサイクルの確立

「グローバル探究Ⅰ・Ⅱ」については、これまでに研究開発した年間指導計画と反省事項に基づいて、SGH研究主任及びSGH担当が学習指導案を改善・修正した。その学習指導案をホームルーム担任会等で周知し、授業を実践した。授業実施後は、ホームルーム担任会及びグローバル探究検討チームで振り返りを行い、改善ポイントを次年度の指導計画に反映させた。

イ フィールドワーク（FW）の実施に伴うPDCAサイクルの確立

(ア) 県内リサーチ（8月23日）

職業人講話を5月に実施し、県内リサーチは職業人講話であげられた地域を訪問し、そこでのインタビューを通して、地域の情報を収集する機会とした。地域は、梶原、大野見、久礼、須崎、日高、土佐山、香北、龍河洞の8地域である。協力していただいたゲストスピーカーは、全地域を通して51名に上る。訪問後は、訪問した企業のミッションやビジョンを考察し、訪問先企業の付加価値や成功要因等についてまとめ、発表会を行った。

(イ) 国内リサーチ

a 大阪リサーチ（8月1～2日）

23名（1年生10名、2年生13名）が参加。高知では経験できない大企業や研究所訪問や大阪大学での授業、大阪事務所の方のお話をお聞きして、高知県を外から客観的に分析することや、オープンイノベーションを起こす時代の最先端に行く企業について学ぶことができた。

b 東京リサーチ（1月30日）

1年生全員が参加。東京都内の34の企業で、訪問学習及び地域創生モデル案の発表を行った。本年度は運営指導委員会のご支援により、東京リサーチで協力いただける企業を8社増やすことができた。どの企業も大変協力的に関わってくださり、事前学習でテレビミーティングを行った企業もあった。また、食関連だけでなく多様な生徒の興味関心に対応できるようになってきた。

(ウ) 海外リサーチ

a 香港リサーチ（9月23日～27日）中止・・・遠隔により実施

香港の情勢不安により中止としたが、訪問予定であった現地のルター高校の協力により、web会議を実施し、お互いの学校や地域のことについて、情報や意見交換等の交流を行うことができた。このことは、今後の交流の手段の一つとして活用できる有意義なものとなった。

b シンガポールリサーチ（9月23～27日）

生徒が取り組む二つの探究テーマを探るべく、2年生8名が参加。科学技術研究庁の Experimental Therapeutics Centre をはじめ、三菱商事シンガポール支店など、国際的な研究所や企業で日本語、英語両方で取材を行った。また、JETRO Singapore ではシンガポールという国の概要を、Jurong Birdpark では国を跨いで自分の夢をかなえた動物看護士に取材ができた。

c タイリサーチ（10月26～29日）

「タイ人を高知県へ」を探究テーマに、2年生5名が参加。本年度も四国銀行の協力によりタイ（バンコク）で実施される「四国インバウンド商談会 in バンコク」に同行させていただいた。現地では「タイ人の好む祭りは何か?」「好みの味はどのようなものか?」等についてリサーチ活動を実施。現地に直接足を運ぶことにより、インターネットや高知では分かり得なかったリアルなものが見えてきた実りある4日間となった。

d 台湾リサーチ（9月23日～27日）

1年生10名が、(公財)日本台湾交流協会台北事務所、實踐大學、延平高級中學等を訪問し、日本との関係性を通じた台湾の歴史、台湾の食生活等について理解を深めた。延平高級中學では、「学校紹介」「高知県の郷土料理の紹介」について英語で発表、質疑応答を行い、お互いの食文化などについて生徒間で話し合いを行った。延平高級中學には4年連続ホームステイも受け入れていただくなど、特別な関係を築くことができている。

ウ 大学との連携

(ア) グローバル探究での講演及び指導・助言

「グローバル探究Ⅰ」では、SGH事業の前身ともいえる「クリエイティブ・シンキング」のころからご指導いただいている高知大学の教員から、高知県が抱える問題の現状と背景や今後起こりうる問題、問題を改善する取組等について、多角的な視点から考えることができるように講義していただいた。さらに、探究とは何かや、サブテーマである六次産業について講義をしていただいた。生徒の発表に対しては、内容に対する評価と共に発表姿勢等についても指導・助言をいただくことで、発表内容の充実につながった。

「グローバル探究Ⅱ」では、県内外の大学教員から継続的に助言をいただいた。多様なリサーチ内容に合わせ、地域貢献、人文社会、経済、農学、教育という多分野に渡り、多くの先生方に来ていただいた。探究の方向性や、得たい情報の在処や紹介、専門的な視点と知識を得られただけでなく、現実的に行われている解決策の先行事例を多数得られ、解決策の提案を行う時に、より現実的な議論ができた。助言をいただくに伴い、講師に向けた発表の機会を複数回設けたことで、生徒が発表する行為に慣れ、発表準備や発表資料の作成も効率的に行えるようになった。

エ 英語探究活動の実施とその評価

(ア) 英語運用能力の育成

「英語運用能力を磨く」ことは、本校SGH事業の2本柱のひとつである。1年次に十分な量のインプットとアウトプットを重視し、その後の英語による探究活動の基礎力の向上を目指し、2年次にはサブテーマに基づいた英語の探究活動と、「グローバル探究Ⅱ」で行う日本語による探究活動との融合を図りながら、3年次の英語による国際シンポジウムに向けて、英語運用能力の向上を目指した。3年次には、英語による国際シンポジウム及び英文エッセイ作成を通じて、英語の4技能運用能力の向上を目指した。

パフォーマンステストやその実施に向けた準備の授業でも、生徒の全体的な英語使用量の増加を意識した。各技能のパフォーマンステストを取り入れることはもちろん、多読、多聴、多話、多書にも取り組み、それらの評価方法を検討することにより指導方法を改善してきた。

多読やプレゼンテーション、スピーチ、ディベートなどの取組では、タブレットを活用して探究活動を進めており、生徒は情報収集や整理が容易にできるようになった。またプレゼンテーションを行う機会を増やしたことで、発表態度が全般的に改善された。

(イ) 探究活動の実施

3年生は、「英語課題探究」(普通科選択)では、3月に選択者を数回集め、テーマ決めを行った後、1学期には、国際シンポジウムに向けて、内容の調査、論理の組み立て、内容の精査、データ更新、論理の修正、原稿の英訳、英文原稿の修正、パワーポイント作成、プレゼンテーション練習を行った。2学期の「英語課題探究」では、英文エッセイ作成として、英文パラグラフの書き方、テーマ決定、テーマに沿ってリサーチ、エッセイ修正・完成、エッセイ内容のプレゼン用資料を作

成し、プレゼンテーション及び英語による質疑応答を行った。

「グローバル・エデュケーションⅡ」（英語科）では、クラス全員が関わるように、発表班（2グループ）、パネルディスカッション班（意見発表・日本語要約）、司会班、パンフレット作成班に分かれて、「英語課題探究」と同様の活動を行った。2学期前半では、英文エッセイのテーマを決定し、論理の吟味をしながら、アウトラインの作成を行った。後半では、「英語課題探究」と同様に英文パラグラフの書き方、テーマ決定、テーマに沿ってリサーチ、エッセイ修正・完成、エッセイ内容のプレゼン用資料パワーポイントを作成し、プレゼンテーション及び英語による質疑応答を行った。

2年生は、「英語表現Ⅱ」（普通科）及び「グローバル・エデュケーションⅠ」（英語科）で、「信念／信仰と食」「食とフェアトレード」「言語／習慣と食文化」のサブテーマに基づき、グループで英語による探究活動を実施した。また、探究結果をクラスでプレゼンテーション、質疑応答を行った。昨年度に引き続き、今年度も従来のグローバル課題の学習に加え、食に関する内容を各テーマに盛り込んだ。宗教の場面ではイスラム教のハラールフードに代表される各宗教の食を取り扱ったり、貧困の場面では発展途上国における主要作物がどのような役割を果たしているかなどを学んだ。授業は、各テーマについて最初に命題を与え、それに対して賛成か反対かを示し、その根拠を二つ述べるというフォーマットを提示して、1学期はグループ発表を行った。また2学期には、別の命題について個人で探究し発表した。個人発表の際には、発表の機会を少しでも多くするために生徒を4グループに分け、全員が4回ずつ発表する機会を与えるように設定した。また、本校は以前から多くの外部講師を招いて授業を行っている。

1年生は、サブテーマ学習を予定していなかったが、英語による探究入門という位置付けで、調べた内容のプレゼンテーションを行うことや、自分の意見を理由とセットにして練習を行うことで、次年度に向けた学習の素地作りに努めた。

オ 事業評価の研究

(ア) グローバル・リーダーとしての資質・力量の変容に関する研究

グローバル・リーダーとしての資質・力量について、「世界の中での日本人としての文化的アイデンティティ」、「幅広い知識と教養」、「コミュニケーション能力」、「リーダーシップ」、「課題発見・解決能力」、そして「社会的課題に対する関心」の因子を抽出し、研究開発初年度より調査を行っている。本年度も5月と2月に調査を行い、各資質・力量因子についての変容について分析した。

(イ) グローバル・リーダーとしての資質・力量形成が英語学習や英語学業成績に影響を及ぼす研究

平成28年度に研究開発した英語学習に関する14項目を本年度も実施し、英語学習への意識がグローバル・リーダーとしての資質・力量の意識とどのような関係にあるかについて調査した。

7 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 目標の進捗状況

ア 本構想において実現する成果目標の進捗状況

- ・自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組んだSGH対象生徒の割合は48.5%である。
- ・自主的に留学した、または海外研修に参加したSGH対象生徒は57人である。
- ・将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考えるSGH対象生徒の割合は43%である。
- ・公的機関から表彰されたSGH対象生徒は17人である。
- ・将来にわたって国際的な視野でグローバルな地域課題を解決したいと考えるSGH対象生徒の割合は、49%である。

イ グローバル・リーダーを育成する高校としての活動状況

- ・課題研究に関する国外の研修参加者は23人であった。
- ・課題研究に関する国内の研修参加者数は延べ771人である。
- ・課題研究に関して、大学教員等の外部人材は延べ40人の方々が参画してくださった。
- ・課題研究に関して、企業等の外部人材は延べ200人近くの方々が参画してくださった。

(2) 事業成果

ア 生徒の変容

- ・グローバル探究で学んだ手法が、授業や部活動・学校行事にも活かされ、これまで以上に生徒が主体的に取り組むようになり、部活動の上位入賞や生徒会行事のスムーズな運営につながった。また、探究活動を実施する中で、対外的な調整や部活動との両立などスケジュール管理のスキルが身につくとともに、放課後や休日を活用した自主的な調査・探究を行う生徒が増えるなど、学校全体がより活性化された。

- ・成果発表会や国際シンポジウムを重ねる中で、生徒のプレゼンテーション能力は目に見えて向上している。特に、上級生が英語による発表やステージ上で堂々とディスカッションする様子は、1年生には憧れの存在ともなっており、生徒の成長の大きな原動力となっている。
- ・1年次は人前で発表することに慣れていない生徒も、3年次には全ての生徒が一定のプレゼンテーション能力を得ている。その成果はAOや推薦入試だけでなく、一般の2次試験や就職試験でも役立っている。
- ・生徒はグローバル探究に取り組むことから、学際的、教科横断型の思考をするようになった。

(ア)「グローバル探究Ⅰ」における成果

- ・職業人講話・県内リサーチの位置付けについて
職業人講話及び県内リサーチの実施により、地域創生モデル案を考えるために必要な地域に関する情報の収集や情報の整理をしっかりと行うことができた。また、マッピングを通じて地域での人々のつながりや地域の課題との関係性が明らかになった。
- ・中間発表について
本年度は、地域の方の講話のまとめ、講話からインタビューまでのまとめ、プレゼン資料完成の三つの時期で、中間発表を行った。それぞれ、クラスの生徒、中学1年生、担当教員を対象として発表をし、どのような対象に対しても対応するような発表を心掛けさせるようにした。
また発表に関しては、パフォーマンス評価を取り入れ、どのように発表すればよいのかに関しても、生徒にしっかり意識をさせて発表させることができたため、多くの班で事実に基づく論理的な説明やパフォーマンスのできる発表ができた。
- ・成果発表会について
各地域で講師をしていただいた方々をお招きし、各発表にコメントをいただいた。発表の中から今後、地域で活動したら面白くなりそうな地域創生モデル案を選んでいただいた。

(イ)「グローバル探究Ⅱ」における成果

- ・自分達が立てた仮説を証明する実験的活動を行い、その結果を集計するグループや、アンケート対象を目的に合わせた外部対象で取るグループも出てくるなど、より本質的な探究に取り組み始めた。自ら企画、実施、調査したりインタビューすることで、社会的で現実的な現状を知ることができた。
- ・評価表に沿って、学術論文のルールに則り、かつ研究目的や研究方法も書けているリサーチペーパーが多数見受けられるようになった。
- ・発表することで、グループの探究内容が初めて自分のものとなり、また、他グループの発表を聞き、他者の考え方の違いや論理展開の違いを知り、視野が広がった。
- ・リサーチペーパー作成時に、過去のリサーチペーパーがよく参考にされるようになった。また、過去のリサーチペーパーの内容をそのまま借用するようなグループもなく、適切な参考として使用していることが分かった。

(ウ)「グローバル探究Ⅲ」における成果

- ・生徒個人で探究テーマを設定し、リサーチペーパー（個人論文）の作成方法を理解することを通じて、思考のプロセスや探究活動の手順を学ぶことができた。また、リサーチペーパー（論文）の書き方や引用文献の使用方法などを理解することを通して、大学等で研究を進めるうえでの基礎固めとなった。
- ・生徒自身の将来像が明確となり、探究した内容を大学や専門学校でさらに深めたいという志望を持つ生徒が70%となった。また、担当教員もリサーチペーパー作成のアドバイスや面談を通して、生徒の進路希望や適性などの把握につながった。
- ・リサーチペーパー作成の準備を2年次の終わり（春休み）から始めたことにより、短期間での作成ができるようになった。1年次からのリサーチ活動の積み重ねがあり、情報収集力も高まった。また、独自アンケートを実施したり、放課後や休日を利用して自主的に企業訪問、電話でのインタビューなどを行ったり、実態を調査、分析を行うことに抵抗が少ない生徒が増えた。
- ・先述した「高知西高等学校SGH国際シンポジウム」では、学年の代表に選ばれたグループが探究の成果を発表することができた。自分たちの考えを、すべてのグループがこれまでの探究の成果として英語で堂々とプレゼンすることができた。また、中国上海から上海外国語大学附属外国語学校東高校と中国香港からルター校の高校生とのパネルディスカッションにおいても、英語を活用した活発な議論がなされた。

(エ) 進学指導上の成果

表1は、平成27年度から令和元年度までの国公立大学のAO入試・推薦入試Iの結果を表したものである。平成27年度が、本校のSGH事業の1期生になるが、この事業による探究学習（グローバル探究I・II・III）を通じたプレゼン能力の向上も相まって、自分のやりたいことをしっかりと表現することが必要であるAO入試や推薦入試Iに積極的にチャレンジする生徒が多くなってきた。このように、探究学習で取り組んだ内容が自分の進路に直接つながるような生徒が増えてきたことは、この事業の大きな成果の1つと言える。

受験年度	H27	H28
合格者/受験者 (合格率)	19/ 46 (41.3%)	32 / 54 (59.3%)
	H29	H30
	9 / 70 (55.7%)	38 / 67 (56.7%)
		R1
		35 / 60 (58.3%)

表1

イ 事業に対する教職員の意識の向上

5年間で教員の探究的な学習に関する指導力が高まった。当初は、新しく始めようとするグローバル探究の授業に対する教員の不安や、シラバスをゼロから策定することなど、数々の難題があったが、徐々に取組が改善され、現在ではほとんどの教員がこうした探究的な学習の取組の必要性を実感している。

評価等については、まだまだ改善の余地があり、さらに継続した研究が必要である。指定事業の終了で終わることなく、引き続き探究学習に取り組んでいきたい。

【グローバル探究の成果】	R01	H30	H29	【SGH事業により伸ばした資質能力】	R01	H30	H29
グローバル探究に携わることで生徒理解の深まりにつながったか？	肯定 84.3	79.7	73.6	コミュニケーション能力	82.1	78.0	85.7
	否定 15.7	20.3	26.4	リーダーシップ	62.5	42.4	31.0
グローバル探究に携わることで自身の教科指導の充実や改善につながったか？	肯定 60.8	42.9	41.5	主体性・積極性	71.4	51.7	54.8
	否定 39.2	57.1	58.5	自己管理能力	66.1	47.5	40.5
			(%)	基本的な生活習慣	67.9	61.0	52.4

昨年度以降SGH事業の活動を受けた3年生の国公立大学の推薦・AO入試における合格者^(%)が、SGH事業の指定を受ける前と比べ、30名程度から40名前後に増加し、それ以降も一定の水準を維持するなどの成功を収めたことにより、教職員がSGH事業の有用性を強く認識するようになった。本年度も、国公立大学の推薦・AO入試における合格者数は昨年度並みであったが、合格率は上がっており、改めて取組の成果を感じている。

この結果は、研究成果を発表する多くの生徒が、原稿の棒読みにならないよう工夫しながら、グループの他のメンバーと協力して、論理的な構成で研究成果を発表する姿、また多くの聴衆や参加者を前にしても、物怖じしないで発表する姿を見ることで、多くの教員が生徒の研究そのものの質的な向上、研究内容を他者に伝えるスキルとマナーの上達、そしてそれらを支える自信や自尊心の高まりを感じとっているからではないかと推察される。

ウ 事業に対する保護者の関心の高さ

保護者対象の学校評価アンケートの結果では、「SGH事業は充実している」と回答した保護者は今年度は80.4%と8割を超えた（昨年度78.8%）。多くの保護者にSGH事業の内容が理解され、期待を寄せていることがわかる。また、「情報発信は充実しているか」については、肯定的意見が今年度は70%を超えた（昨年度68.2%）。これは、本校が定期的に発行している「SGH通信」や各種リサーチ活動の案内文書などをClassiで生徒及び保護者へ配信したことで割合が増えたと考えられる。

さらに、年二回（7月・2月）開催される発表会は平日開催であるにも関わらず、昨年度に比べ参加してくださる保護者も増加した。事業に対する保護者の関心は非常に高いと推察される。

(3) 事業評価

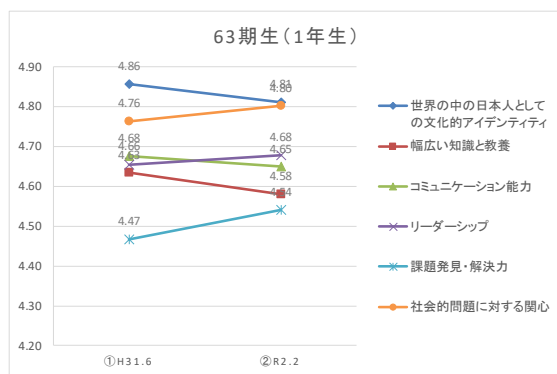
ア グローバル・リーダーとしての資質・力量の変容について

目指すグローバル・リーダー像を「郷土や我が国、国際社会の発展に貢献する志をもち、高知から世界へチャレンジできる人材、あるいは、国際社会で活躍できる人材。」と位置付け、育成すべき資質・力量を、「1 世界の中での日本人としての文化的アイデンティティ」、「2 幅広い知識と教養」、「3 コミュニケーション能力」、「4 リーダーシップ」、「5 課題発見力・解決力」、「6 社会課題に対する関心」とし、研究開発仮説である「地域課題を自己と関連付けながら探究し、課題解決モデルをグローバル展開する探究活動を行うことで、グローバル・リーダーに必要とされる力が身に付く。」（仮説1）及び「仮説1と関連付けた英語による探究型授業を行うことで、国際的な場面において世界の人と英語で対等に意見交換をすることができるコミュニケーション能力が身に付く。」（仮説2）を実証すべく取り組んできた。

実証方法として、初年度から続けている、30項目からなる意識調査「高校生の問題解決意識と行動に関するアンケート」を、1年生（63期生）280名、2年生（62期生）280名、3年生（61期生）280名を対象に令和元年6月と令和2年2月（3年生は令和元年12月）に実施した。1年生（63期生）の調査結果は令和元年6月と令和2年2月でt検定を行い、2年生（62期生）と3年生（61期生）は4回分の調査結果について多重比較を行った（表1～3参照）。その結果、2年生（62期生）は平成31年2月調査結果と令和2年2月調査結果とを比較すると、すべての因子で有意な差が見られた。これは、第2学年の探究内容が、高知県内から世界へと視点を変え、探究を行う活動に変わったことと、それに伴って地域課題について関心が高まったことが理由と考えられる。このことから、生徒たちは、学習内容に応じて意識が変容していることが伺える。3年生（61期生）においても、令和元年6月調査結果と令和元年12月調査結果とで、全ての因子で有意な差が見られた。

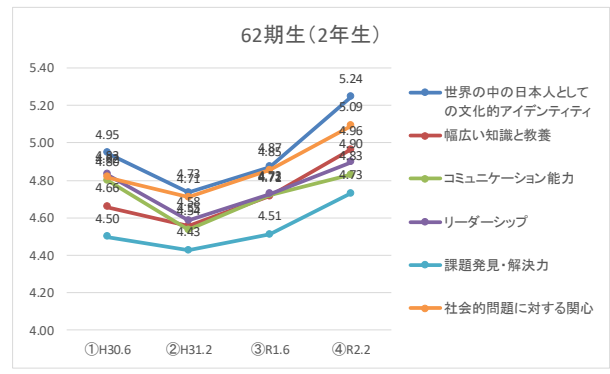
これらのことから、本校のSGHカリキュラムが、グローバル・リーダーとしての資質や力量の育成に有意な効果をもたらしていると考えられる。

表1



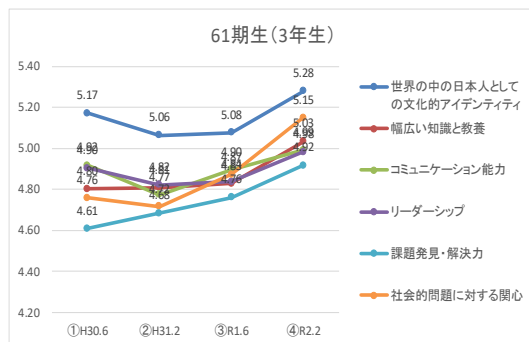
満点は7.0点 有意水準は1%

表2



満点は7.0点 有意水準は1%

表3



満点は7.0点 有意水準は1%

イ グローバル・リーダーとしての資質・力量と英語学習について

平成29年2月に、英語学習に関する項目が含まれる意識調査「高校生の問題解決意識と行動に関するアンケート」を実施し、グローバル・リーダーとしての資質や力量が英語学習にどのように作用しているか調査した。その結果、図1のように、「コミュニケーション能力」と「社会課題に対する関心」が「英語学習動機」や「英語表現の認知的方略」に一定の影響を及ぼしていることが明らかになり、「英語学習動機」が英語の学業成績に影響を及ぼしていることを確認した。

本年度においても全学年を対象に英語学習に関する項目(Q31～50)について調査した。以下は3年生（61期生）が、1年次（平成30年2月）、2年次（平成31年2月）、3年次（令和元年12月）に実施した調査結果について多重比較を行ったものである。その結果、以下のようなことがわかった。

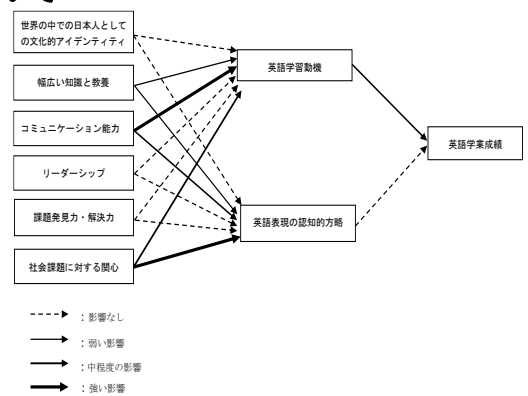
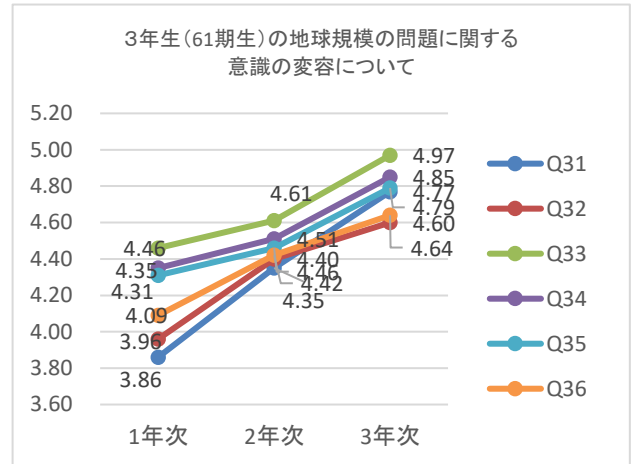


図1：「グローバル・リーダーの資質・能力 - 英語学習 - 英語学業成績」のパス解析結果

(ア) 地球規模の問題に関する意識について

すべての質問項目において、学年を追うにつれて、有意な差が見られた。これは2・3年次におけるグローバル探究を中心として、英語表現やグローバルエデュケーション、また教科横断的に世界の課題について取り組んだり、他グループの発表から課題を見聞きしたりしたことが、視野を広げるうえで大きく作用したと考えられる。

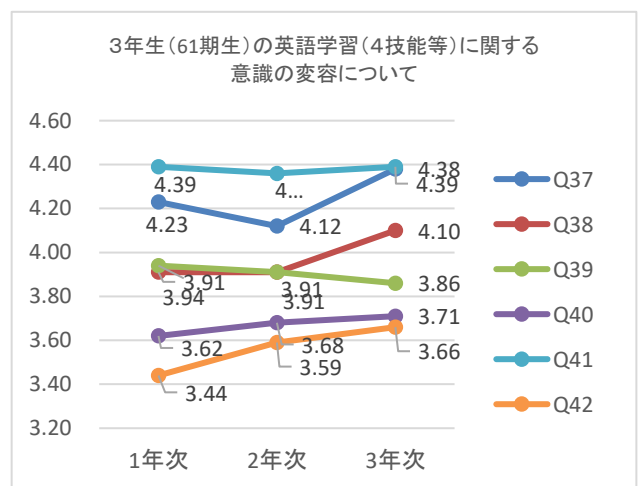
表1 (満点は7.0点 有意水準は1%)



(イ) 英語学習(4技能等)について

ほぼすべての質問項目において、学年を追うにつれて、有意な差が見られた。特に「Q37読むことが得意」と「Q38書くことが得意」については、1年次よりも自己評価がかなり高くなっていることが分かった。

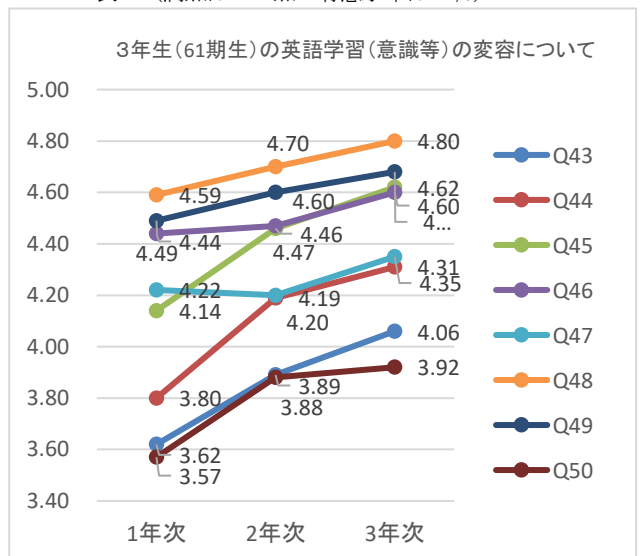
表2 (満点は7.0点 有意水準は1%)



(ウ) 英語学習(意識等)について

表1ほど顕著ではないものの、すべての質問項目において、学年を追うにつれて、有意な差が見られた。相手を意識した言動を心掛けようとする意識が高まっていると考えられる。

表3 (満点は7.0点 有意水準は1%)



以上のことから、グローバル・リーダーとしての素地ができつつあると考えられる。

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 課題

ア グローバル探究I

- ・この1年間で訪問させていただいた県内8地域で、総勢62名の地域の方にお世話になった。各地域1名の方にコーディネートをしていただいたが、それでも県内リサーチの計画を立てるまでのやり取りが非常に煩雑になった。
- ・生徒のモチベーションをあげ、取組の目標の一つにするためにも、1年生のスタート当初に、どのようなプレゼン大会があり、そこではどのような力を習得しておかなければならないか等をきちんと説明することが必要であると感じた。

イ グローバル探究Ⅱ

- ・グループ決めの際のSDGsのターゲット目標の提示で、高知県の地域創生のテーマも選択しやすいように、高知県の抱える具体例をターゲットの例を書き加えたが、1年次から探究してきた高知県の地域創生に取り組む生徒はまだ少数だった。
- ・昨年の2年生の研究ペーパーを活用する生徒が増えた分、その内容を正しいものとしてそのまま受け入れてしまう生徒がいるので、他者の論文を批判的に読める力の育成を行う必要がある。
- ・世界や地域の諸問題の解決に対して、問題の原因に即した提案を推奨しているが、大きな問題設定から、具体的な地域の現状に行き着くまで調査が進まない班もある。調べが進むたびにパワーポイントへアウトラインとしてまとめるものの、グループ内での議論が深まっていないことが理由として挙げられる。なぜそうなるのか、そもそも正しいのか、などグループで疑問を投げかけあい、話し合う時間が少ない。教員は、担当する生徒グループが多く、生徒がどこで困っているのか、教員と班の話し合いの時間が取れない。グローバル探究の時間に、全てを担うことには無理があり、調べ事は各自で授業時間以外で行うことや、教科横断的に探究に必要な力をつけるカリキュラムマネジメントも必要である。
- ・ワードやエクセルなどのパソコン操作で苦労している部分も多く、放課後に基本操作の教授を行うことも考えたが、全員が一斉に基本知識を得ることが必要で、情報学習の時間を何時間か取り、しっかり教えることが必要である。同様に、必要な情報の調べ方も、題材を出して練習する時間が必要である。
- ・探究内容を整理するために、年間3回の発表の場を設けているが、毎年ながら協力していただく大学教員の確保も難しく、生徒も議論をするより、その準備のために時間を割かなくてはならない。各クラスの担当と議論し助言をもらう時間を充実させる必要がある。
- ・クラス代表を選出する際に、選出者が探究活動全体に対する各グループの取組や、進路を加味した選定をすることがあるため、研究ペーパーが論理的に書かれたチームが選ばれるとは限らない。また、選考委員の評価も分かれるため、選考評価の基準を考え直す必要がある。探究成果のすぐれたグループを選ぶことができる評価表に直す。
- ・ポスターセッションや発表で、まだまだ原稿の棒読みになっている生徒が多い。しかし、聞く立場も経験するため、それでは、内容が聞きづらいことにも気付いている。今後のグローバル探究以外の授業でも発表活動を入れてもらうことで、発表する訓練を続ける。

ウ グローバル探究Ⅲ

- ・インターネットの情報のみが引用されている研究ペーパーが多い。図書室の書籍や新聞・雑誌なども文献として利用するなど、さまざまな情報に触れることで視野を広げさせるとともに、論文の信頼性も上げさせたい。
- ・研究ペーパーの構成については理解できているが、8月以降の進路に関する深い探究では、それらを別物と捉えて十分には活かされていない。進路指導部および国語科教員と協議しながら、進路目標に沿った探究活動（小論文や志望理由作成を含む）になるよう指導に工夫を重ねる。

エ 英語学習

- ・ネイティブによる授業が週に1時間であるため、クラスによって時間数にばらつきがある。
- ・探究活動そのものは「グローバル探究」で慣れているが、プレゼン内容が、調べ学習にとどまっていて、問題を掘り下げる力が弱い。
- ・なじみのない専門用語が多いため、メモを見ながら発表する姿が見受けられた。
- ・昨年度のグローバル探究Ⅱのグループのメンバーとは異なるため、探究内容を一から決め直す必要があった。
- ・論理的な思考を鍛える必要がある。（抽象的な概念へと考察を深めていけない。）
- ・英語の授業でありながら、英語の絶対量が少ない。
- ・昨年度の反省から、7月の国際シンポジウムに向けて時間が限られているので、3月からテーマを決め始めたが、リサーチや仮説の設定などに多くの時間を要した。

オ 教科・科目のSGH化（探究型学習）

- ・方法先行の授業となっており、目標設定（目指す生徒像・教室像）が不明瞭である。
- ・事象に対するグローバルの視点が欠如している。
- ・指導と評価が表裏一体であるという認識が不十分である。

カ 評価

- ・「振り返りシート」の活用方法が不十分であった。生徒理解のみならず、カリキュラムにフィードバックする方法を具体化する必要がある。
- ・「グローバル・リーダーの資質・力量に関する意識調査」については、昨年度に引き続き実施はできたが、依然、活用方法が不十分である。教員や生徒に対するフィードバックの方法を具体化する必要がある。

(2) 改善点

ア グローバル探究全体

- ・各学年の年間指導計画について、横断的、縦断的なカリキュラム作成を行う。
- ・教員の指導力向上を図る校内研修を実施する。

イ グローバル探究Ⅰ

- ・1学期前半の授業内容を精選し、タブレットの使用方法、資料の作成方法、プレゼン方法などの地域創生モデル案の作成のために必要となる基本的な知識を早い段階で学習させる必要がある。
- ・探究スキルや探究プロセスの習得を1年間で行う。

ウ グローバル探究Ⅱ

- ・リサーチペーパーとして、現状と課題が整理できれば良いというレベルを指導者、生徒ともにもっと浸透させていく必要がある。
- ・探究やリサーチペーパーの理解を深める教員向けの指導者講習会に、予算内でお願いできる指導者を探す。
- ・助言していただける先生方のさらなる開拓が必要である。
- ・評価と点数の間には一定幅を持たせ、達成している度合いは正しく評価するが、点数は一定得られる成績システムに作り変える。
- ・生徒が前年度の2年生のリサーチペーパーを批判的に読める力の育成を行う必要がある。
- ・個別指導をもっと取り入れる。

エ グローバル探究Ⅲ

- ・生徒の進路実現につながるリサーチペーパー（個人論文）作成
- ・リサーチペーパー（個人論文）作成の指導に際して、適切な助言ができる専門家や指導教員の配置を「チーム」で編成する必要がある。

オ 英語学習

- ・必要に応じて、他の英語の科目で調整をするようにする。
- ・英語に直す前に、根拠が妥当であるかチェックする時間を十分確保できるような工夫をする。
- ・簡単な表現を使って、聞き手に伝えるということを第一に考えて発表するようにする。
- ・年度末の多忙な時期であるが、3月にその時間の確保をする。
- ・日本語でのリサーチをやめるのは現実的でないため、リサーチは英語の授業外で行い、授業内ではできるだけ英語でまとめたり、発表したりする時間に充てる。

カ 教科・科目のSGH化（探究型学習）

- ・校内SGH推進委員会を中心に、各教科での探究型学習について協議し、各教科内で共有し、授業実践を通じて探究学習を深化させる。

キ 評価

- ・今後も引き続きグローバル・リーダー像の資質・力量に係るルーブリックについて、国際バカロレアのATLスキルを参考にしながら再整理する。
- ・リサーチペーパーやプレゼンテーションに係るルーブリックを改善するとともに、リサーチペーパーの到達レベルをより適切に設定する。
- ・教員の評価能力が高まるよう、「指導と評価」に関する研究者等を招聘し校内研修を実施する。
- ・「高校生の問題解決意識と行動に関するアンケート」の内容改善を行う。

【担当者】

担当課	高等学校振興課	TEL	088-821-4542
氏名	石丸 右京	FAX	088-821-4547
職名	指導主事	e-mail	311801@ken.pref.kochi.lg.jp